

## 審査の結果の要旨

氏名 波多野（小堀）彩子

人を援助する行為は、かつては親密性や愛情を基盤とする家族によって実践されていたが、少子高齢化や核家族といった社会変化に伴って専門性を基盤とする対人援助職に外部化されるようになった。その結果、バーンアウトという形で対人援助職の負担が顕在化する現象が起きている。そこで、本論文は、対人援助職の特性に焦点を当て、その発生要因とメカニズムを臨床心理学的観点から再検討することを目的とした。第1部第1章では、家族的関係の外部化が対人援助職固有の負担を生んだとの問題意識に基づき、専門的援助関係の構築の観点からバーンアウト発生のメカニズムを再検討する論文の構成を示した。

第2部では研究レビューによって論点の明確化を行った。第2章で対人援助職を「対面的接触を通じて人を援助するサービス職であり、その活動は利用者との間で相互作用を有する」と定義し、サービス提供の安定維持のために対人援助職従事者の健康問題が重要課題となっていることを示し、第3章で「人を相手とする仕事を行う人々に生じる情緒的消耗、脱人格化、達成度の減退の症候群」とするバーンアウトの初期定義の重要性を指摘し、第4章で仕事として他者を援助する負担に注目するという本研究の着眼点を明確化した。

第3部では専門職援助との差異を明確化するために家族ケアの特徴を検討した。第5章でワーク・ファミリー・コンフリクト調整過程を題材とする質問紙実験を行い、愛情や精神的安定の確保という動機が家族ケアの維持メカニズムにおいて強く働くことを示し、第6章で筋ジストロフィー患者の家族への質問紙調査によって家族介護の特徴として否定的感情が生じにくいメカニズムが存在することを示し、専門職援助との違いを明確化した。

第4部では、対人援助職が経験する職業的疲労の様相を検討した。第7章では臨床心理士への面接調査を行い、クライアントへの共感及び否定的感情の受容が疲労をもたらし、バーンアウトにつながる可能性を指摘した。第8章では看護師への質問紙調査を行い、共感性がバーンアウトに及ぼす影響を階層的重回帰分析によって検討した結果、クライアントに対して自己志向的で個人的感情反応を示す専門職は援助関係の維持が困難になり、バーンアウトし易いことが示された。第9章では攻撃性の異なるクライアントの受付場面に関するシミュレーション実験を行い、クライアントの否定的感情（攻撃性）を受容すると情緒的消耗感が高くなり、バーンアウトの可能性が高まることが示された。

第5部第10章では臨床心理学的観点から研究成果を総括し、バーンアウトを「対人援助職がクライアントとの関係を嗜癖化した結果、自己破滅的になった状態」と再定義した。また、バーンアウトのアディクションモデルを提唱し、嗜癖化した援助関係では消耗的働き方を自ら制御できず、援助関係や援助者の職業生活に破綻が生じるとの提言を行った。

本論文は、愛情と精神的安定のある家族による援助がバーンアウトを起こしにくいのに対して専門職の自己志向的共感と否定的感情の安易な受容がバーンアウトを引き起こしやすいことを実証的に示し、援助関係において等価性を維持し、回復する力を阻害しない援助関係維持がバーンアウトの発生を予防することを主張した点で特に意義が認められる。よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するに相応しいものと判断された。